

# 錦鯉と鯉師の歴史と文化

## はじめに

錦鯉は、日本の国魚である。それは、日本の美を代表する「泳ぐ宝石」、「泳ぐ芸術品」である。風雅な日本庭園にしつらえられた池の中に群泳するその姿は、重なり合いながら華麗な模様を織りなしている。錦鯉一尾一尾の紋様は千差万別で、見ているものを飽きさせることはない。まさに、錦鯉は「生きた錦絵」である。

この錦鯉、生物学的な分類ではコイ *Cyprinus carpio* である。マゴイやノゴイと呼ばれる野生種の体色が通常黒褐色であるため、錦鯉の煌びやかさは多くの人びとにマゴイとは異なった仲間の魚であるとの誤解を与えることもあるが、それは紛れもなくマゴイから生み出された。しかも、それは、この日本で生み出された。そのローマ字表記の“Nishikigoi”の名は、全世界の錦鯉ファンのあいだで通用する。日本生まれの錦鯉は、インターナショナルな動物なのである。

日本の錦鯉の文化は、錦鯉を作る「鯉師」と錦鯉愛好家、そして、それらを取り持つ錦鯉流通業者によって担われている。簡単にいえば、錦鯉は「商品」であり「鯉師」から流通業者を経て消費者たる愛好家に流れていく。もちろん、熱心な錦鯉愛好家ならば、生産地に直接赴き、自分の目で確かめて直に購入することもある。「鯉師」と愛好家、錦鯉流通業者は、ともに錦鯉に深くつきあう人たちであり、それぞれの立場を越えて、錦鯉に「商品」以上の共通した眼差しを向けている人が多い。ただ、錦鯉を養う目的が異なっているため、それぞれのもつ技術や知識、価値観などを、十把一絡げに語ることはできない。本論では、紙数の都合上、「鯉師」のもつ知識や技術に限って解説することにしよう。

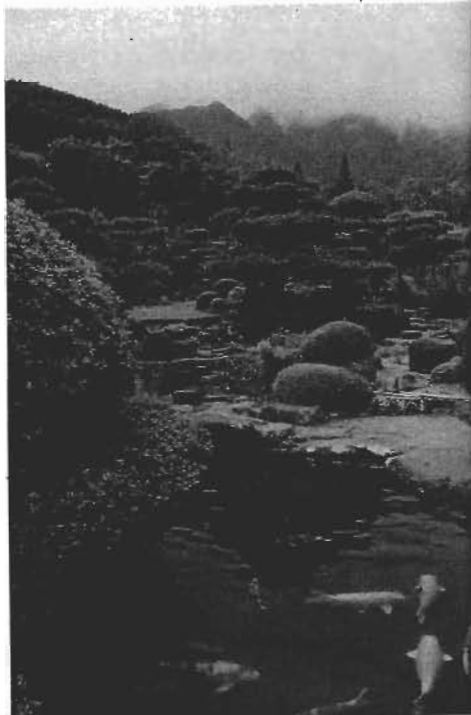


写真1 日本庭園と錦鯉。錦鯉は日本庭園の全体的な景観を引き立てる重要な要素になっている (馬場俊三氏提供)

## 錦鯉の誕生

錦鯉の故郷は、新潟県中越地方である。現在の小千谷市の東部・東山地区から旧・山古志村(現・長岡市)、川口町の一部に跨る山間地域で、かつて二十村郷と称された。一帯の標高はそれほど高くはないが、山は急峻で谷は深く、まさに山嶺が重畳と連なっている。一つ山を越えると、さらに山という典型的な山村であり、冬場には3カ月以上も雪に閉ざされる豪雪地帯でもある。



写真2 錦鯉の故郷・二十村郷の「野池」。かつては階段状の棚田であった (馬場俊三氏提供)

二十村郷の人びとは、イネを作るために傾斜地を天上に向かって開墾し、階段状に駆け上る棚田を幾重にも作り上げてきた。錦鯉の生産が盛んになると、その棚田の一部を、錦鯉を育て上げる「野池」(養鯉池)へと、さらにその姿を変えてきた。

錦鯉が野生のコイと別の生き物であると誤解されやすいことはすでに述べたが、錦鯉に関して、もう一つ誤解されやすいことがある。それは錦鯉の歴史である。

テレビなどの時代劇で、お殿様が池のほとりで色とりどりの錦鯉に餌を与えるシーンが描かれるためか、錦鯉がかなり古い時代からこの世に存在してきたと、一般の人びとに信じられているようである。しかし、その歴史は、史料上は近世以前に遡ることはできない。錦鯉がこの世に現れたのは、さまざまな現代の飼育書、また錦鯉を飼育する人びとの語りのうえでは、文化・文政期(1804年~1830年)とされる。しかし、それとて裏付ける確たる史料を見つけることはできず、今からかれこれ200年ほど前に突然変異により出現したという錦鯉の「歴史」は、あくまで伝説の位相にとどまっている。

当然、その初発の作出に関する経緯も詳らかではない。この二十村郷は山中奥深く、かつては交通の便が至極悪い土地柄だったため、食料品をよそから運び込むことが困難だったとされる。とくに、冬場の豪雪期には麓の平野部との連絡が途絶することも少なくなかった。そういった中、二十村郷の人びとは、家の外に小さな池を作り、貴重なタンパク源としてのコイを飼育していた。その池は、一部、家の中の台所とつながり、正月などの来客時には、そこから直接コイを掬っ

て「鯉の洗い」や「鯉こく」、「鯉の昆布巻き」に料理していた。海産物に乏しかったこの地では、コイは貴重な食料、食品だったのである。そういう食用コイ飼育の歴史の中から、錦鯉は生まれたとされるが、実のところその正否は定かではない。

非食用のコイ、すなわち錦鯉に連なるコイが、食用のコイと分離して存在していたことは、ようやく明治初頭の文書に見える。したがって、近世末には錦鯉とおぼしきものが存在していたことは、ほぼ確実だろう。たとえば、濁沢（現・長岡市）のとある家は、1874年（明治7）に東京へ「飼鯉」大小16尾を送り、33円の収益を上げていた〔山古志村史編集委員会 1985：345〕。米1石（約150キログラム）が平均7円28銭〔石原編 1925：101〕だった時代である。コイ33円の収益は、なんと米約4.5石（約680キログラム）に相当するから、いくら何でも食用コイではなからう。

しかし、その当時の非食用コイは錦鯉とは呼ばれず、「色鯉」などと称されていたようである。この「色鯉」という呼称は「色恋」に通じ、軟弱で玩物喪志のイメージを与えてしまった。そのため贅沢品として県会で問題となった。そして、その飼育の禁止令が1874年（明治8）に新潟県から布達された。それに驚いた二十村郷の人びとは、県に宛てて嘆願書〔小千谷市史編修委員会編 1967：207〕を提出している。それを要約すると以下のようになる。

今般、「鯉魚玩弄」のごとでご布達なされましたが、私たちの区は、もとより辺鄙で窮乏する土地のため、養蚕と鯉魚を飼育し、生計を立てる一助として参りました。しかし、ご布達のように相成っては、自然と生活が難澁に立ち至る者がありますので、今までのとおり農閑期に売りさばくことをお聞き届けいただきますよう、お伺いたします。

これに対し県は、次のように返答した。

書面で本庁が布達したことは、「鯉魚玩弄」を差し止める趣旨であり、一般食用の鯉を差し止めるものではない。

この件の県からの回答は、食用コイの売買は許すのだから問題なからうという答えであり、いささかのずれである。前の嘆願書を見るかぎり、二十村郷の人びとにとっては「鯉魚玩弄」の方を許可して貰いたいのであり、それこそが死活問題だったのである。しかし、「鯉魚玩弄（コイをもてあそぶ）」とは、あまりにも否定的な表現である。この表現は、非食用の鑑賞コイが、当時まだ、社会に正当に認知されていなかったことを示している。

このような明治新政府の風俗統制下における低い評価に、「色鯉」=錦鯉の先祖たちは屈することはなかった。明治10年代には、その商売と投機は盛んになり、そのため「色鯉」は多くの人びとの耳目を引き、新聞などにもその商売の盛況ぶりが報じられている。

さて、「色鯉」は、名前ばかりではなく、姿も今の錦鯉とはずいぶん異なっていた。後ほど詳しく述べるように、現在、錦鯉には多くの種類がある。しかし、明

治初頭には、マゴイから少し変異して紅一色や黒い斑点が混じった緋鯉や、「浅黄」と呼ばれる種類しか存在しなかった。それが、1889年（明治22）に、蘭木の五助（蘭木は地名〔現・小千谷市〕、五助は屋号）こと広井國蔵氏が「紅白」という種類を作出した。これをもって近代錦鯉の誕生としても差し支えなからう。それ以後、多くの種類が精力的に作出された。さらに1914年（大正3）、上野公園でおこなわれた東京大正博覧会に「越後の変わり鯉」として出品され、その一部は「皇太子殿下（後の昭和天皇）へ献上」がかない、これを契機として名声を博した錦鯉は、全国にその販路を拡げていくこととなる。

しかし、こういう発展にあっても、その名称はまだしっかりと定まっていなかった。二十村郷に位置する東山村（現・小千谷市）小栗山に生まれ、昭和の錦鯉産業の隆盛に大きく寄与した片岡正脩氏が著した『錦鯉談義』には、当時、錦鯉が「模様鯉」、「模様もの」、「色鯉」、「変わり鯉」、「花鯉」など、じつに多様な名前と呼ばれていたことが記されている。同書によると、錦鯉という呼称自体は、大正時代に新潟県庁水産主任官としてコイの品種改良を指導した阿部圭氏という人物の発案という。それを、新潟出身で東京日本橋・高島屋百貨店の屋上で観賞魚の売店を営む井上菊雄氏が大きめに用い、宣伝して広まったことにより、錦鯉の中心的生産地・中越地方でも定着することになった〔片岡 1989：3-5〕。錦鯉は、その名前が定着して、まだ60年ほどの歳月しか経っていないのであるが、その後、その名は日本ばかりか世界中に響き渡るることとなる。

### 錦鯉の種類

錦鯉に人びとがのめり込む重要なファクターとして、その種類の多様さを挙げることができる。現在、錦鯉の種類は色彩や紋様、斑紋などで80種以上に分類されている。魚類学的にはただ一種の魚類が、明治に「紅白」が作り出されて以来、着実に細分化されているのである。この多様な種類は、人間の多様な好みを満たしてくれる。

錦鯉の種類は、「品種」とも表現されるが、他の家畜動物のように、表現形質が固定されて均質性と永続性をもった個体群ではない。たとえば、「昭和三色」という「品種」があるが、それ同士を交配させても、同じく「昭和三色」に分類される錦鯉が生まれる確率は、いまだわずか一割程度と見積もられている。もちろん、親と同じ「品種」になっても、その配

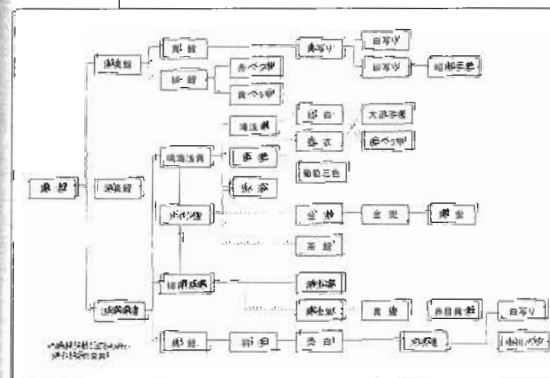


図1 「片岡正脩氏系統図」による「品種」の関係の概略（錦彩出版編 n.d.より作成）



写真3 「紅白」。錦鯉は「紅白」に始まり「紅白」に終わるといわれるくらい、基本的な種類である（馬場俊三氏提供）

色や色の濃淡、斑紋がまったく同じになるはずがない。この表出型の発現の偶然性は、錦鯉飼育・生産をより困難なものにするとともに、より深遠なものにしていく。困ったことに、その態様は生まれた後、成長するに従い変化し、また、季節や飼育環境によっても微妙に変化するため、どんなに優れた「鯉師」でも、その理想の錦鯉の姿を永遠に保つことは困難である。

「上羽」(優秀な)の「紅白」と思っていたものが、春に池に入れて秋に引き上げるときに模様が全部真っ白な「白棒」(価値が低い)になってしまうこともあるという。こういう模様の変化は、「化ける」(変化する)と表現され、人間の力ではどうにも完全にコントロールできない。逆にいえば、ときには期待していなかった「裾もの」(雑ゴイ)や「中羽」(中級品)が、思わぬ「上羽」になることも、可能性としてはゼロではない——減多にないが——。一種ギャング的な側面を、表出型の発現の偶然性は生み出しているのである。

錦鯉の「品種」の代表は、先に紹介した「紅白」である。「紅白」、「大正三色」、「昭和三色」をもって、「錦鯉の御三家」と称するほどポピュラーな「品種」である。「紅白」は、かつて「更紗」と呼ばれていた。その名のとおり純白の地肌に、濃く鮮明な紅斑が入ったものである。白地に緋(赤)というシンプルなデザインは、日本人に日の丸を連想させるのか、人気が高い。

「大正三色」は、単にサンケとも呼ばれ、白地に緋と墨(黒)が入ったもので、白、紅、黒の三色が織りなす一体感とバランスの妙が問われる。「昭和三色」も白、紅、黒の三色で構成される「品種」である。どこが違うかといえば、その色の地肌が大きく異なる。「大正三色」は、白地に緋と墨が入ったのに対し、「昭和三色」は黒地に紅と白の斑紋が入ったものである。実のところ、両者の区別は、素人目には容易ではない。「昭和三色」は、「手鱗」(胸鱗)の付け根に「もとぐろ」と呼ばれる丸く黒い斑点が



写真4 「大正三色」。白、赤、黒の三色の絶妙なバランスが肝要（馬場俊三氏提供）



写真5 「昭和三色」。三色でも黒の力強さが際立っている（馬場俊三氏提供）

ついたり、また、「はち」(頭頂部)に、「はちわれ」という黒墨の線模様は稲妻の如く入ることから区別できるというが、慣れていないものにはまったく同じに見える。

「品種」は、この御三家以外にも多数ある。その分類法は大枠統一されているが、細かい分類になると人によって時折異なってくる。一家言もった専門家ならば、なおさらその分類にひどくこだわる。たとえば、新潟県水産技師であった天野政之氏は、錦鯉を「紅白」、「大正三色」、「昭和三色」、「写り物」、「光り無地もの」、「光り模様もの」、「浅黄・秋翠」、「変わり物」の8種類に大分類するが[天野1990]、錦鯉愛好家の団体・全日本愛鱗会の重鎮、黒木健夫氏は「紅白」、「大正三色」、「昭和三色」、「べっ甲」、「写りもの」、「浅黄・秋翠」、「衣」、「変わりもの」、「黄金」、「光り模様もの」、「光り写りもの」、「金銀鱗」、「丹頂」の13種類に大分類する。そして、それぞれの分類は、さらに細かい小分類に分けられる。たとえば、黒木氏は、「紅白」を「白無地」、「赤無地(緋鯉)」、「赤羽白」、「面被り紅白」、「鼻つき紅白」、「二段紅白」、「三段紅白」……など16種類に細分化している[黒木1986]。天野氏は、黒木氏が大分類として独立させた「丹頂」を、「紅白」の中も含めて小分類にしているから、話はややこしい。錦鯉を何十年も見続けた人びとには、その人独自の分類が生まれてくるのである。当然、素人には、一朝一夕に「品種」を同定することは難しい。

錦鯉専門のプロの「鯉師」たちは、やはりオーソドックスな御三家にこだわり、

その作出を競い合う。副業でやっている「鯉師」たちは、そういう気合いの入った「鯉師」に到底太刀打ちできないので、ライバルの少ない「変わりもの」やドイツゴイ系などの「品種」の作出に特化する場合もある。「鯉師」によって、「品種」の得意不得意、好き嫌いは異なっている。

表1 錦鯉の「品種」分類一覧表(黒木 1986、天野 1990より作成)

黒木健夫(1986)による分類		天野政之(1990)による分類	
大分類	小分類	大分類	小分類
紅白	白無地、赤無地(緋鯉)、紅斑、黒帯、赤羽白、口紅斑、鼻取り紅白、鼻つき紅白、二段紅白、三段紅白、四段紅白、寫身、一本鱗、ダイヤモンド、ナツレオン、胸鱗、衣、べっ甲	紅白	白無地、赤無地、紅白(更紗)、鼻の子、更紗、電撃三色
大正三色	口紅三色、赤三色、緋三色、ダイヤモンド、アジ三色	大正三色	三色、大正三色
昭和三色	赤写り、黒写り、緋写り、白写り	昭和三色	(小分類なし)
写りもの	写り物、写り、写り、写り、写り	写り物	写り、写り、写り、写り
浅黄・秋翠	浅黄、秋翠	浅黄・秋翠	浅黄、秋翠
衣	衣	衣	衣
丹頂	丹頂	丹頂	丹頂
黄金	黄金	黄金	黄金
光り無地もの	光り無地もの	光り無地もの	光り無地もの
光り模様もの	光り模様もの	光り模様もの	光り模様もの

### 錦鯉の交配

このような「品種」、とくに大分類で把握される「品種」が、誕生し改良されていく発展の歴史は、「鯉師」や愛好家たちに共通して認識されている。とくに、「紅白」、「大正三色」、「昭和三色」の御三家の発展の歴史は、錦鯉発展の歴史といってもよく、半ば伝説的に語られる。その錦鯉発展の道筋は、「系統」という言葉で表現される。

「系統」とは、本来は、錦鯉の良好な形質が、次世代にある程度安定して伝わるラインである。「紅白」を例に見てみよう。先に紹介したように1889年（明治22）に、蘭木の五助こと広井國藏氏が「紅白」という種類を作出した。これは「五助更紗」という銘魚だった。『錦鯉談義』には、その作出の経緯について次のようにある。

國藏氏は、これまでも連年更紗を繁殖していたが、ある秋、東山村中ノ沢（現・小千谷市）の権右工門で催された夜市に、竹沢村（現・長岡市）大内の某出品の若雌を認め、いたく気に入り友人の応援を得て漸く入手した。このめな（雌魚のこと）は、当時後頭部に僅かに赤い緋のある有り合わせの模様のものであったが、雪より白い素地は、鶏卵のむき肌を思わせる潤いを持ち、筋肉が透いて見えるほどの薄皮は、におうばかりに輝いて、若い國藏氏をすっかり魅倒してしまった。これに前からいた桜かな（かなは雄魚）と呼ぶ緋の多い雄を配して得た子鯉が、更紗改良史に一新紀元を画することになった。[片岡 1989：22]

じつにドラマティックな「紅白」の誕生である。この「五助更紗」は「紅白」の原点となり、明治期に蘭木の榮助系、蘭木の宇兵衛系、南荷頃（現・小千谷市）の仙藏系、荷頃の源八系、間内平（現・長岡市）の甚藏系、大正期には朝日（現・小千谷市）の治右衛門系、南荷頃の西系、昭和に入って小栗山の道林系など、多くの「紅白」の系統を生み出した。とくに、大正期に作出された朝日の治右衛門系は優れた「系統」で、竹沢の源之丞系を輩出し、さらに源之丞系は、木沢（現・川口町）の源次郎系に引き継がれる。そして、この「源次郎紅白」から、現在の「紅白」の大きな礎を築いた優秀な系統・竹沢の友右衛門系（「友右衛門紅白」）が作出された。

「友右衛門紅白」は、1938年（昭和13）ごろに竹沢の星野源治氏によって、塩谷（現・小千谷市）の「五郎兵衛紅白」のメナ1本と、木沢の「源次郎紅白」のカナ2本を交配させて作られた。「友右衛門紅白」は、柔和な緋をもつ銘魚であり、その素晴らしさから昭和30年代まで、「親鯉」として多くの優秀な「紅白」を産み出した。

たとえば、1943年（昭和18）、小栗山で「友右衛門紅白」のメナと、「紋次郎紅白」（「系統」は不詳）のカナとを掛け合わせて「弥五左衛門紅白」が作出された。この「弥五左衛門紅白」の「系統」は、品評会などで多くの人賞鯉を輩出している。また、1955年（昭和30）ごろ、岩間木（現・小千谷市）において、明治の逸材「五助更紗」の直系である「源八紅白」と、「友右衛門紅白」を掛け合わせて「田村屋紅白」が作出され、また同じころ、旧・山古志村虫籠では、「友右衛門紅白」のメナ・カナを交配して「武平太紅白」が作出された。1961年（昭和36）ごろには、岩間木において荷頃の「源八紅白」のメナと、岩間木の「三九郎紅白（これは「友右衛門紅白」と、浦柄（現・小千谷市）の「久兵衛紅白」の交配で生まれた）」を交配し「万藏紅白」が、さらに、1963年（昭和38年）ごろ、「友右衛門紅白」のカナと「源次郎紅白」のメナ2本を交配し、武道窪（現・川口町）の「仙助紅白」が作出された。

「紅白」だけ見ても、じつに複雑な交配を幾度も繰り返しており、「系統」と表現する範疇は、単なる遺伝的な血統の範囲に収まらない。むしろ現在では、「系統」は、通常考えられるような純粹の血統の意味で用いられているというよりは、優秀鯉を輩出した家や作者を指し示す記号となっている。そのために「鯉師」たちの屋号が用いられるのである。複雑さの精粗に差こそあれ、他の「品種」も同様の「系統」が「鯉師」たちによって把握されている。

### 錦鯉の選抜

「鯉師」たちにとって、春の雪融けとともにおこなう「池作り」（「野池」の整備）は、錦鯉生産の1年のスタートである。「野池」は、雌雄、年齢ごとに分けて使用される。まず、水を抜かれた「野池」に石灰を撒き、酸性の土壌を中和させ、さらに鶏糞を撒く。これは、植物性プランクトンを増やすための工夫で、その結果、錦鯉の稚魚の餌となるミジンコが増殖する。この地方では、牛の角突き（闘牛）が伝統的におこなわれているが、昔、「鯉師」の中には、その糞を撒く人もいた。「池作りは土作り」といわれる所以である。

「野池」は、魔法の池である。そこでは、天然の餌を食べて育つせいか、錦鯉の色艶が良くなるといわれている。錦鯉愛好家たちが飼育するコンクリート製の池では、長らく飼うとどんなに良いコイも色艶が衰えてくるが、そんなときは、なじみの「鯉師」に頼んで、1年ほど「野池」で委託飼育して貰う。これを「泥をなめさせる」といい、泥を十分になめて引き上げられたコイ・「野池揚がり」は、色艶も体格も良く仕上がってくる。

「池作り」が終わると、「仔取り」（産卵）である。「仔取り」は雪が融けた4月下旬から6月にかけておこなう。優秀な錦鯉を作るには、優秀な「親鯉」が必要である。そのために、良い「系統」のコイを「親鯉」とするための売買や交換が、時折おこなわれる。今は人工授精もあるが、昔は、これはと見込んだ「親鯉」を「野池」に仕切られた生け簀に放し、スギヤヒノキ、サワラなどの枝葉を産卵床として入れてやり自然産卵させていた。その際、受精率を高めるために、メナ1尾に対しカナを2、3尾かける。また、確実に良い子孫を残そうと優秀なメナ・カナ1尾ずつかけ合わせ続けると、次第にカナの力が衰えるといわれ、そのために「ともがな」と呼ばれる別のカナ1尾を一緒にあてがうこともある。多くの「品種」を生産する「鯉師」ならば、20尾以上もの「親鯉」を「仔取り」に用いる。産卵後4～7日でふ化して「毛仔」（稚魚）となる。

錦鯉は、1尾のメナで10万～40万粒の卵をとる。全部で数百万粒もふ化させる「鯉師」はざらにいる。良い錦鯉を作ろうと思えば、大籠の「毛仔」から良いものだけを「選別」することが重要である。第1回目の「選別」は6月下旬から7月上旬にかけておこなわれる。数百万～数十万尾の稚魚から、それぞれの「品種」ごと

に、これはと思ったものだけ10分の1程度を残し、残りは間引く。もちろん、その「選別」数や「選別」の指標は、「鯉師」により、また稚魚のできばえ、「品種」、「系統」などにより変わってくる。「選別」には、微細な特徴を見抜く繊細な観察眼と、大切な稚魚を惜しまず大胆に捨て去る（淘汰する）決断力が鍵である。

「選別」は、さらに8月まで1~2回おこなわれ、800~1000分の1程度（これまた「鯉師」ごとに異なる）まで淘汰される。9月に入ると「田上がり品評会」といって、その年



写真6 錦鯉の選別。炎天下の中、ビーチパラソルの下で、一日中選別にいそむ

生まれた錦鯉のできばえを見る品評会が小千谷、山古志の生産地でおこなわれ、集まった錦鯉ファンに、ある程度売却される。良いものは、次から次へと売れるが、「鯉師」は、将来の優良錦鯉への成長をほんとうに見込んだコイを、おいそれと簡単には手放さない。そういうコイは「立て鯉」と呼ばれ、4年後の成魚になるまで、じっくりと育てられるのである。

10月になると、越冬に向けて「野池」から家の養鯉場に移す「池上げ」がおこなわれるが、ここまで残った錦鯉を「当才」と表現し、翌年春になると「二才魚」となって野池に再び放す。「選別」はその後も続けられ、途中売却されることも考えると、最終的に「四才魚」となって全国レベルの品評会に出品されるのは、わずか数尾、50万~100万分の1程度であるという。その選抜淘汰の凄まじさを、推して知るべしである。

以上のように、錦鯉の発展には、「鯉師」たちが倦まず弛まず努力した交配と選抜という二つの改良の方向性が、重要な意味をもってきたのである。

### 錦鯉の危機

世界に誇る錦鯉。その故郷が、今存亡の危機にある。

2004年10月23日17時56分。新潟県中越地方でマグニチュード6.8（暫定値）の地震が発生し、小千谷市、山古志村、川口町で最大震度6~7を観測した。それは多くの人命を奪うとともに、中越地方の土地家屋を破壊した。新潟県中越地震である。

この地震の最大の被災地である小千谷市、旧・山古志村、川口町に跨る一帯が、まさに錦鯉を生み出した土地であり、かつ、現在でも世界の錦鯉産地の中心である。この大地震による錦鯉の被害は100万尾以上と見積もられ、被害総額は40億円以上にものぼる。まさに、壊滅的打撃といっても過言ではない。

ある「鯉師」は、銘鯉の「親鯉」を失った。また、ある「鯉師」は、大半の錦鯉を失いつつ、やっとの思いで「親鯉」だけは救出することができた。その救出に

は、ヘリコプターまでも動員された。そこには、全国の養鯉家、錦鯉流通業者、錦鯉愛好家たちが集まった。どうにか生き長らえたコイを、復興の日まで預かるという篤志をもつ人びとも現れた。しかし、錦鯉生産の基盤となる「野池」の被害は甚大で、その復旧は容易ではない。

錦鯉は、旧二十村郷の「鯉師」たちにとっては、生きる糧を得る経済動物である。それは、まさに彼らの生殺与奪を握る動物である。また、錦鯉は、日本の動物文化史上、重要な位置を占める文化財である。さらに、錦鯉は、この地域の人びとの地域アイデンティティーを創出する、誇りともなっている。

今、このような緊急の事態にあつて、「鯉師」たちは、自分たちの生活の復旧のみならず、地域の復興をも目指しつつある。本来ならばライバルである他の「鯉師」へ、今春、秘蔵つ子の「親鯉」を貸し出すことを申し出たり、被災地以外にもっている養鯉場の使用を申し出たりした「鯉師」がいる。一時は廃業を考えた人びとも少なくなかったが、仲間励まされて「鯉師」として再挑戦することを決意した者もある。今後、地域を復興させる長い道のりにおいて、錦鯉は、地域に生きる人びとをつなぎ、勇気づける「結集の原点」になってくれるであろう。一日でも早く、錦鯉と「鯉師」が復活することを、心より祈らずにはいられない。

### 謝辞

本稿には、貴重で美しい多くの写真を、(株)錦彩出版・馬場俊三氏よりご提供いただいた。ここに記して、感謝の意を表する。

### 引用文献

- 天野政之 1990『日本の美錦鯉』加島書店
- 石原保秀編 1925『米価の変遷』乾裕長生会
- 小千谷市史編修委員会編 1967『小千谷市史・本編下巻』小千谷市
- 片岡正脩 1989『錦鯉談義』（自費出版）
- 錦彩出版編 n.d.『錦鯉マニュアル』全日本錦鯉振興会
- 黒木健夫 1986『錦鯉入門』新日本教育図書
- 山古志村史編集委員会編 1985『山古志村史・通史編』山古志村



写真7 被災した錦鯉。停電のために多くの賞魚を錦鯉が酸欠死した（馬場俊三氏提供）

2005年10月  
発行予定

次号予告

# BIOSTORY vol.4

## 特集「いまむらさき」

吉野裕子の生き方 (仮題) .....

吉野裕子100枚書き下ろし、

### 「日本神話にみる生き物文化誌」(仮題)

そして

ライフストーリー「吉野裕子の世界はいかにして生まれたか」

陰陽五行で読み解かれる「日本」の原像、

その深層に浮かび上がるものは？

※本誌のご注文はお近くの書店または昭和堂へお申し込みください

### 編集後記

この1月に、昨年の新潟中越大地震で大きな被害にあった山古志村、小千谷市の方々にご参加頂き、緊急支援の集会を東京大学でもった。錦鯉の養殖と闘牛は中越地方の基幹産業であり、地元の人びとはコイやウシと強い絆で結ばれてきた。人間と生き物とのさまざまな関わりを考える生き物文化誌学会としてもなんとか支援活動をもちたいと考えた。昨年の12月、本号で執筆されている菅豊さんとともに現地を訪れ、集会に参加していただく手はずをととのえた。集会を実現するうえで、現地で調査を続けてこられた菅さんの大きな働きに敬意を表したい。ちょうどその日は、死んだ大量のコイの匂いに悩まされながらの埋葬作業が行なわれた。愛するコイの腐臭は人々にとり、どのように映ったのだろうか。

この2月には琵琶湖の北にある西浅井漁業協同組合でコイヘルペスのために死んだコイの話聞いた。漁協がちょうど溝鼻部に面しているのが、死んだコイが琵琶湖の南から大量に流れ着いたようだ。風光明媚な湖北の地が異常な騒ぎとなったのだ。

コイの死が人為によるものでないとしても、生き物の生と死は人間の想いと無関係ではありえない。生き物文化誌学会にとって、「生き物の死」はとても重要な課題であるにちがいない。

本号の編集作業が終わり、次号から編集体制が新しく生まれ変わる。私にかわり、小長谷有紀さんが編集長となる。走り続けたこの2年、読者の皆様のご声援に厚くお礼を申し上げます。今後、コイの滝上りのようなバイオストーリーの飛躍を期待していただきたい(秋道智彌)。

生き物文化誌 バイオストーリー 第3号

2005年6月30日発行

編集 「バイオストーリー」編集委員会(編集長 小長谷有紀:本号編集 秋道智彌)

発行 生き物文化誌学会(会長 秋道智彌)

生き物文化誌学会事務局

〒158-0098 東京都世田谷区上用賀2-4-28 (財)進化生物学研究所内

TEL: 03-5701-7861 FAX: 03-5701-7861

編集協力 昭和堂 D 稲本雅俊

発売 株式会社昭和堂

〒606-8224 京都市左京区北白川京大農学部前

TEL: 075-706-8818 FAX: 075-706-8878

印刷 中村印刷

©「バイオストーリー」編集委員会ほか 2005

Printed in Japan

ISBN 4-8122-0503-4 C0400